

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イペロアメリカ研究センターニューズレター vol.11 (2021年度)

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



Piedra del Sol (Museo Nacional de Antropología de México)

目次

連続公開講座

暦から知るラテンアメリカ世界 —儀礼・権力・世界観— (全3回)

<https://www.kansaigaidai.ac.jp/news/detail/?id=1300>

- 第1回 2021年10月6日(水) マルチメディアホール & オンライン
クスコにおけるインカ国家の暦と儀礼 松本 亮三 (東海大学)
Calendar and Rituals of the Inca State in Cusco MATSUMOTO, Ryozo (Tokai University)
..... 1
- 第2回 2021年10月13日(水) ICCホール & オンライン
古代メキシコ・アステカ文化の暦 井関 睦美 (明治大学)
Aztec Calendar in Ancient Mexico IZEKI, Mutsumi (Meiji University)
..... 6
- 第3回 2021年10月21日(木) マルチメディアホール & オンライン
日本の年号(元号)と世界の暦 久禮 旦雄 (京都産業大学)
Japanese Gengo and World Calendar KURE, Asao (Kyoto Sangyo University)
..... 10

公開講座

- 2021年7月16日(金) オンライン
カタルーニャにおける独立支持の増加 —その要因と現状—
奥野 良知 (愛知県立大学)
La subida del apoyo a la independencia: factores y situación actual
OKUNO, Yoshitomo (Aichi Prefectural University)
..... 14
<https://www.kansaigaidai.ac.jp/news/detail/?id=1248>

表紙: アステカの太陽の石 (撮影 山森靖人 2012年2月19日)

第 14 回スペイン語教授法研究会

3 de julio de 2021, sábado ONLINE / 2021 年 7 月 3 日 (土) オンライン

Aplicaciones de los corpus textuales a la enseñanza y la investigación del español

VALVERDE, Pilar (Universidad Kansai Gaidai)

教育への書き言葉コーパスの応用とスペイン語研究

バルベルデ, ピラール (関西外国語大学)

19

.....
https://www.researchgate.net/publication/353210190_Aplicaciones_de_los_corpus_textuales_a_la_ensenanza_y_la_investigacion_del_espanol

公開講座

2021 年 6 月 8 日 (火) オンライン

人生一度きり！ 一国際捜査の刑事が語る自分流生き方ー

安次富 浩 (兵庫県警察本部 刑事部 組織犯罪対策局 国際捜査課 警部)

(スペイン語学科卒 1988 年)

You Only Live Once!: A Police Detective of International Investigation Talks About His Theory of Life

AJITOMI, Hiroshi

Hyogo Prefectural Police H.Q. Criminal Investigation Department Organized

Crime Control Bureau International Investigation Division Police Inspector

Graduate of Spanish Department (1988)

24

.....
https://www.kansai-gaidai-dousou.jp/activity/news/index.php?c=topics_view&pk=1623395977

教員エッセイ

インカ帝国の源流を求めて

土井 正樹 (関西外国語大学)

Exploring the Source of the Inca Empire

DOI, Masaki (Kansai Gaidai University)

29

連続公開講座

暦から知るラテンアメリカ世界 —儀礼・権力・世界観— (全3回)

第1回

2021年10月6日(水) マルチメディアホール & オンライン

クスコにおけるインカ国家の暦と儀礼

松本 亮三 (東海大学)

Calendar and Rituals of the Inca State in Cusco

MATSUMOTO, Ryoza (Tokai University)

ABSTRACT

The principal materials on the calendar of the Incaic Cusco are the Spanish post-conquest documents. It is generally believed that a year and a month were determined by the observation of movements of the sun and the moon, respectively, to produce a year consisting of 12 months. However, there are so many different testimonies among the *cronistas*, that important problems have remained unsolved, such as the astronomical observation methods, the coordination of a solar year with lunar months, and the beginning of the year. Here, we first present the perspectives for solving these problems, following the introductory explanation about the nature of human time-recognition and calendrical systems. Next, analyzing the structure of the calendar based mainly on the document of Molina in the 16th century, we will show that the Cusco calendar divided a year into two independent periods, i.e. ceremonial and agricultural, and that it provided the ritual device necessary to govern and integrate the Inca State.

I. 時を感じる、刻むこと —時間認識の基礎—

ウィットロー (1989) は、時間は人類共通の経験だが「われわれが、視覚、聴覚、味覚、嗅覚についてもっているような形での、特別な時間感覚をもっているという証拠はまったくない」と言う。時間認識は、人類諸集団の文化特性に基づくものであり、文化ごとに異なったリズム(物事が起こるタイミングの感覚)とメロディー(長さを伴った持続の感覚)を伴った時間が認識され、多様な暦が作られてきたと言える。

松本 (1995) は、時間認識の一方の極を「感じられた時間」と、もう一方の極を「刻まれた時間」と名付けた。「感じられた時間」とは、太陽や月という天体の可視的な動きをモデルとして、特定のタイミングの連続、つまりリズムに基礎を置く時間であり、ホライズン・カレンダーや原初的な太陰暦を生じさせた。この場合、時間のメロディーの重要性は低く、一般に長期的な紀年法は見られない。

一方、「刻まれた時間」は、自然の動きを再解釈したモデル=計時具を再びモデルとする

ことで認識される時間である。それは、斉一な単位時間の累積としてのメロディーに基礎を置いた時間であり、リズムはメロディーから生み出される。メロディーは、年や世紀などの循環的時間を奏でると共に、過去へも未来へも無限に延びる数直線として意識され、長期的な紀年法が確立される。その典型が、西欧近代から発した現代の時間である。

II. ホライズン・カレンダーから多様な暦へ

太陽は、例えば北半球においては、夏至には最も北の地点で、冬至には最も南の地点で出没し、半年ごとに向きを変えて、北から南へ、南から北へと移動しているように見える。ホライズン・カレンダーとは、南北に連なる山の頂や鞍部、あるいは人工物を地平線上のマーカースとして利用し、日出没位置の変化を読み取ることによって、重要な時点の到来を可視的に知る暦である。よく知られた例が、北米のホピ族の暦である。彼らは、太陽の出没位置に従って、播種や収穫を行うほか、冬至から夏至に至る時期には、山から精霊カチーナが降りて来て村にいて、夏至から冬至に至る時期にはカチーナは村にいないと考え、1年を2期に分けて理解していた。また、月の朔望の観測に基づいて、1年を12～13カ月とする原初的な太陰太陽暦が使われていた。「感じられた時間」を認識していたとすることができる。

西洋化以前の日本や中国も、1年12カ月の太陰太陽暦を使用していた。太陽暦の1年は太陰月の12カ月より約11日長い、西洋で言うメトン周期を知っており、基本的に19年間に7回の閏月を挿入することで、1太陽年と12太陰月のずれを調整していた。また、十干十二支に基づく60年周期の循環暦や元号を用いた紀年法もあった。「刻まれた時間」に近い太陰太陽暦である。一方、12朔望月を1年とする、純然たる太陰暦も存在する。イスラームのヒジュラ暦である。ムハンマドのヒジュラ（聖遷）を紀元とする紀年法も確立しており、現時点はヒジュラ暦1443年にあたる。

中米のマヤ文明でも人工の基壇をマーカースとするホライズン・カレンダーで太陽の動きを捉え、月齢や金星の動きも記録していた。これに加え、365日周期のハアブ暦、260日周期のツオルキン暦、この2つを統合した約52年周期の循環暦をもち、さらに、紀元前3114年を起点とする長期的な紀年法も使用していた。多種の時間が並存する複雑な暦の体系を作り上げられていたのである。

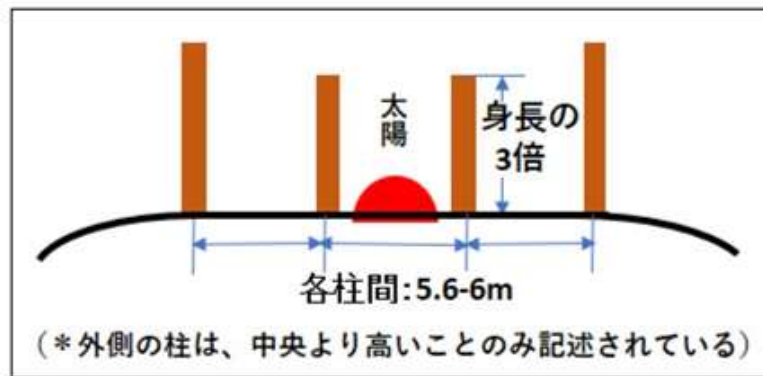
III. クスコ・インカの天文観測 —ホライズン・カレンダー—

1532年、スペインによる征服時、インカ国家は、コロンビア西南端からチリ中部に至る長大な版図を築いていたが、文字がなかったため、暦や天文観測については、征服後の記録に頼らざるを得ない。16世紀のスペイン人記録者、ベタンソス、ポロ・デ・オンデガルド、シエサ・デ・レオン、サルミエント、スペイン人とインカ皇女の間生まれた第1世代のメスティーツであるガルシラーソ、そして17世紀にそれまでの記録を集大成したコ

ボなどの記録を総合すると、クスコでは、次のように、ホライズン・カレンダーによる太陽の観測と月の朔望の観測が行われていたことが分かる。

インカの公用語であるケチュア語では、1年はワタと、暦月はキリヤと呼ばれており、1年は12太陰月で構成されていた。夏至と冬至などを印付けるために、クスコの東西の山上に、スカンカ、または、パチャウナンチャンゴ、サイバとも呼ばれる施設が作られていた（クスコは南半球にあるため、夏至は12月に、冬至は6月に起こる）。この施設は、ベタンソスとガルシラーソは4本1組の柱で構成されており、中央の2本の柱間に日昇あるいは日没の太陽が位置する時が観測されたというが、他の記録では柱の数にまで言及されてはいない。この施設が何カ所あったのかについても、東西に2カ所ずつあり、夏至と冬至の日出没を示したという記述（ポロ、ガルシラーソ）のほか、東西に4カ所ずつあった（ベタンソス）、あるいは夏至と冬至のほか各月ごとに設けられていた（コボ）とするなど、記述は一定していない。

このほか、観測されたのは、柱の影であった（シエサ）とか、柱の頭部に孔が開けられており、孔を通して地面を照らす太陽光であった（サルミエント）との異聞もある。春分と秋分については、ガルシラーソだけが、クスコ



ガルシラーソが記述するスカンカの模式図

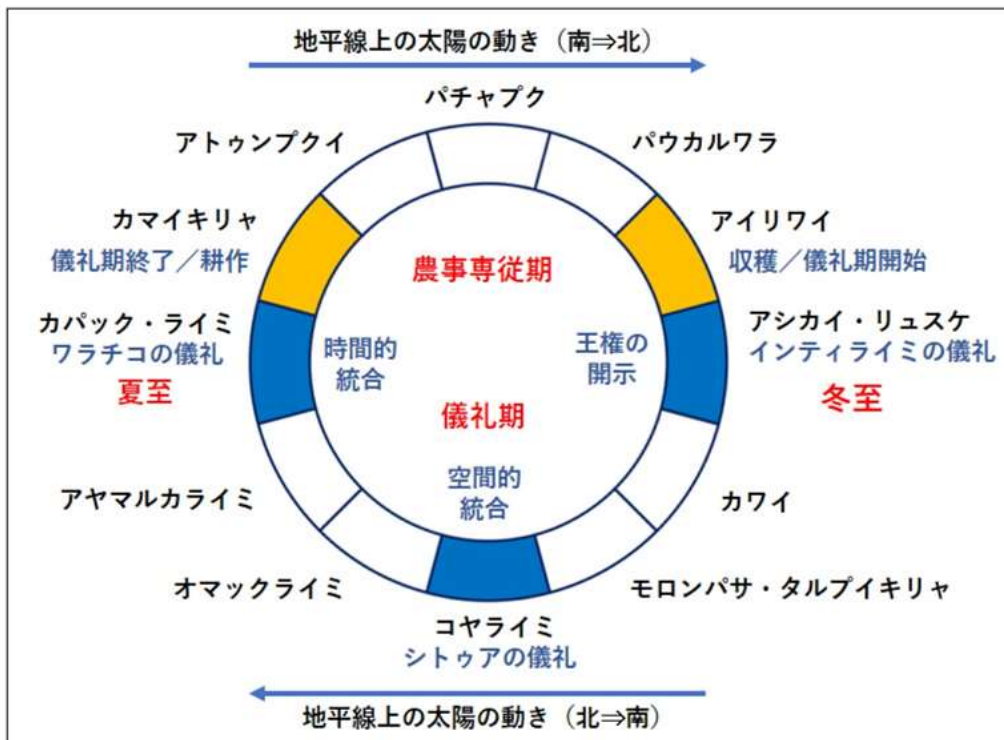
の大神域コリカンチャの前庭にその観測装置があったと述べている。太陽の観測が年間の重要な時点を定めたことに疑いはないが、置閏法（太陽年と太陰月の調整方法）は不明である。ただし、ポロとコボの記述は、1太陽年と12太陰月の差分は、適宜12カ月のどこかに加えられていたことを示唆している。

残念なことに、バウアーとディアボン（1995）等の根気強い調査にも拘わらず、現在のクスコ周囲の山上では、スカンカの痕跡はまったく発見されていない。しかし、クスコの北西、ウルバンバのサイワ山には、砂岩のブロックで建てられた高さ約4mの柱が35.3m離れて2本残っており、第11代インカ王ワイナ・カパックの宮殿、ケスピワンカから、2本の柱間に冬至の日昇が観察されることが確かめられている。これが現存するスカンカの唯一の例である。このほか、マチュピチュ遺跡には、スカンカではないが、冬至と夏至の日の出が観測できる施設があり、マチュピチュ西方のリュクタパタ遺跡の長さ30mを超える通廊が、冬至の日昇の方向に一致するなど、クスコの周辺部では、至の日昇を観測した証拠を認めることができる。

IV. クスコ・インカの12カ月 —儀礼と構造—

ベタンソス、ポロ、コボ、モリーナなどのスペイン人に加え、先住民のワマン・ポーマも、インカ暦の12カ月について記録を残しているが、各月の名称と儀礼や活動の内容には異同があり、年首も夏至あるいは冬至と一様ではない。ここでは、最も詳細な記録を残しているモリーナに従って、次段落①～③の三大儀礼を中心に、主要な月の儀礼と活動を見ていく。

①モリーナが年首とするのは、5月末から6月に至るアシカイ・リュスケの月であり、インティライミの儀礼が行われた。冬至の太陽と共に弱った王が力を回復することを祈るのがこの儀礼の主題だが、王は重臣と共にクスコを離れ、月の終わりにクスコに帰還したことが注目される。これは、王の不在を演出することで、逆に王権の存在を被支配者に対して開示する儀礼であったと見ることができる。②8月末に始まり、9月の春分を含むコヤライミの月には、シトゥアの儀礼が行われた。クスコ生まれのインカ族だけが、病と災厄を退散させる浄化儀礼を行うのだが、浄化が済むと、最初はクスコの者だけが、次いで被支配諸族の代表者も招かれて、インカに忠誠を誓う。この儀礼の主題は、クスコを中心とするインカ国家の空間的統合を示すことであったと解釈できる。③11月末に始まり、12月の夏至を含むカパック・ライミの月には、ワラチコというインカ族の成年式が舉行された。少年たちが集められ、前月のアヤマルカライミの月に、初代王が行った旅を模倣し、この月には、徒競走や鞭打ちなどの試練が課され、最後に禪が与えられ、耳朶に孔を開けて耳



クスコのインカ暦の構造

飾りを着けることが許された。これは、将来を担う者たちに伝統を継承させることで、国家を支配するインカ族の時間的統合(永続性)を示す儀礼であったと考えることができる。これらは、王権の開示、王国の空間的統合と時間的統合という、国家の存続に不可欠な 3 つの要件を、クスコを舞台に国家儀礼として示すものであり、ギアツの言う劇場国家が大々的に演出されていたと見ることができよう。

三大儀礼に挟まれた各月にも種々の儀礼が行われたが、夏至を含むカパック・ライミ直後のカマイキリヤの月には、これら 7 カ月にわたる儀礼で神々に焼いて捧げられた供物の灰が、すべて川に流された。これは全儀礼の終了を示すものであり、同時に耕作開始の儀礼も行われている。それに続く 4 カ月は、儀礼は行われず農耕にほぼ専従し、冬至を含むアシカイ・リュスケの月直前のアイリワイの月には、収穫儀礼が行われて農事専従期の終結と儀礼期の開始を印付けたのである。

このように、クスコのインカ暦では、冬至から夏至にいたる儀礼期と夏至から冬至にいたる農事専従期が、太陽が地平線上を北から南へ動く期間と、反転して南から北へと動く期間に対応している。それは、IIで述べたホピ族のカレンダーの 2 期区分と相同するものであり、ホライズン・カレンダーの特徴を明確に示している。2 期それぞれの始期である夏至を含む月も、冬至を含む月もどちらも年首に似た性格をもっている。これに加えて、インカ暦には紀年法が存在しなかった。まさに時間のリズムに基礎を置いた「感じられた時間」が、クスコとインカ国家を支配していたのである。

引用文献

- 史料をはじめ多種の参考文献は省略し、本稿で発行年を付して引用した文献のみを記す。
- Bauer, B. and D. Dearborn, 1995 *Astronomy and Empire in the Ancient Andes*, Univ. of Texas Press.
- Whitrow, J.W. 1989 *Time in History*, Oxford Univ. Press.
- 松本亮三 (編) 1995 『時間と空間の文明学I：感じられた時間と刻まれた時間』、花伝社。

第2回

2021年10月13日(水) ICCホール & オンライン

古代メキシコ・アステカ文化の暦

井関 睦美 (明治大学)

Aztec Calendar in Ancient Mexico

IZEKI, Mutsumi (Meiji University)

ABSTRACT

The Aztecs, based in a city-state called Tenochtitlan (AD1325-1521) located in the Basin of Mexico, created one of the most influential cultures in pre-Hispanic Mexico.

The Aztec calendar consists of a 365-day solar cycle and a 260-day ritual cycle. Each day and year is represented by the combination of a number and an iconographic symbol, such as an animal, and closely related to the myths. Major historical events were incorporated into the myths by means of the calendar, and were visualized and conventionalized in their society through rituals. In this lecture a case study of the iconographic representations of large-scale natural disasters recorded on Aztec stone sculptures and in pictorial manuscripts is focused on as an example of the mythologized historical events.

1. はじめに

アステカ文化(後1325年~1521年)は、先スペイン期のメソアメリカ文化圏で最後に繁栄した文化である。200年弱という短期間で終わった文化であるが、メソアメリカ文化圏で継承されてきた高度な文化要素を最大限に活用することで、メソアメリカ一帯に広く政治経済的、文化的影響を及ぼした。そのような伝統的文化要素の一つが暦である。メソアメリカでは暦は神話や神々の特性と強く結びつき、宗教的側面も強かった。本講演では、アステカ王国が政治的、宗教的に暦を利用して、大規模自然災害という歴史的イベントを乗り越え、さらなる王国の発展を実現した事例を説明した。

2. アステカ文化とアステカ王国

メソアメリカ文化研究において「アステカ」とは、古典期終末期以降メキシコ北部から南下してきたナワの人々を指す。ナワ人の伝説的故郷である「アストラン」にちなんで、現在の研究者がナワ人・ナワ文化につけた名称が「アステカ」である。ナワの言語はナワトル語で、アルファベットのような表記法は無く、表音・表意の機能を持つ絵文字を使用した。暦も絵文字で表現された。

13世紀頃に他のナワ人集団より遅れてメキシコ盆地に移動してきた人々に、メシーカ人がいる。メシーカ人の守護神ウィツィロポチトリは、「サボテンの上で蛇を呑んだ鷲がいる

地」を約束の地であると予言していた。メシーカ人は 1325 年、メキシコ盆地のテスココ湖上の島を約束の地とみなし、都市国家テノチティトランを築いた。テノチティトランは 1428 年、テスココ湖周辺の都市国家であるテスココ、トラコパンと共に「三都市同盟」を結成した。この都市国家同盟を一般に「アステカ王国」と呼ぶ。1519 年にスペイン人が到来した際には、アステカ王国は最盛期を誇っていた。1521 年にアステカ王国は陥落し、その後 300 年間、メソアメリカはスペインの植民地となった。

アステカ王国のなかで最も政治経済的影響力の強かった都市が、テノチティトランであった。「メシーカ」は、現在の国名「メキシコ」の語源であり、現在の首都メキシコ市はテノチティトランを破壊した上に建造された。メキシコ合衆国の国旗にはテノチティトランを表す「サボテンの上で蛇を啜えた鷲」が描かれ、メキシコの国章もこの図像になっている。現在のメキシコにとっても、メシーカが過去の栄光として意識されていることがうかがえる。

3. アステカの暦と神話

アステカ文化では、メソアメリカの伝統的な 2 つの暦が継承され利用された。すなわち 260 日の祭祀暦と 365 日暦の太陽暦である。祭祀暦はナワトル語で「トナルポワリ」と呼ばれ、20 の暦日と 1 から 13 の数字の組み合わせで構成された。それぞれの暦日は特定の神格や儀礼と関連し、占術や誕生日占いなどに使用された。太陽暦は「シウポワリ」と呼ばれ、20 日間を一月とした 18 ヶ月と残り 5 日間で計算された。太陽暦は季節ごとの農耕儀礼と関連していた。各月は特定の神々が司り、それらの神々に捧げる儀礼が行われた。

トナルポワリとシウポワリが組み合わさって一巡する期間は、太陽暦で 52 年に相当する。52 年は、暦日のうちの 4 つ（兎、葦、ナイフ、家）と 1 から 13 までの数字の組み合わせで表現された。52 年周期は、神話的には太陽の生死のサイクルであり、52 年の最初の年である「1 の兎」には太陽に活力を与えるため「年を束ねる儀礼」という暦のリセット行事が各共同体ごとに行われていた。

52 年周期と太陽信仰との関係は、アステカの神話に語られている。神々はこれまでに 4 つの「太陽」の創造と破壊を繰り返し、現在は第 5 の「太陽」の時代とされる。第 1 の太陽と第 2 の太陽は 676 年間続き、第 3 の太陽は 364 年、第 4 の太陽は 312 年続いた。いずれも 52 の倍数である。太陽の消滅は、時間の流れがなくなり闇が続くことになるので、世界の終わりを意味する。ここから太陽は 52 年ごとに消滅の危機を迎えると考えられた。

第 5 の太陽は、神々が聖なる火を焚き、一人の神がその中に身投げすることで誕生した。しかし当初太陽は空に浮いたまま微動だにしなかった。太陽が軌道を描くことは、時間の発生と世界の存続を意味する。そこで神々は太陽に動く力を与えるため、自らの命を太陽に捧げた。この物語は、太陽が動き続けるためには、人間も生贄の心臓を捧げ続けなければならないという思想の背景となっている。生贄を獲得するためには、戦争で生きた捕虜

を捕らえる必要がある。そのためアステカ王国は戦闘的な太陽信仰に基づき常に戦争をすることになり、これが王国拡大の原動力になったと考えられる。メシーカの守護神ウィツィロポチトリは太陽神の化身かつ戦争の神として祀られ、メシーカ王はウィツィロポチトリの受肉した姿とされた。暦は時間の流れ（＝太陽の動き）であり、世界の秩序の構図である。つまりメシーカ王は時間と世界を司る者でもあった。そして王国の発展に伴い、52年の「年を束ねる儀礼」の重要性も増していくこととなる。

4. 暦と歴史理解 —自然災害の神話化—

アステカ王国の中心地となったメキシコ盆地は、周囲を 3,000m 以上の山々に囲まれた標高 2,000m 以上という地理的環境に位置する。そのため水害や旱魃などの極端な自然災害被害を受けやすい。アステカ王国時代にも、王国の存続を脅かすほどの大規模自然災害に見舞われた記録がある。メシーカ王第 5 代モテクソマ 1 世（在位 1440-1469 年）と第 9 代モテクソマ 2 世（在位 1502-1520 年）の治世である。両王とも王国の発展に多大な貢献を果たした伝説的な人物である。偶然にも、災害が起きたのはどちらも「1 の兎」（1454 年、1506 年）の年であった。

アステカの歴史を記した『テレリアーノ・レメンシス絵文書』には、1454 年に発生した大旱魃で、飢饉によって疫病が発生し、多くの死者が出たことが記録されている。また 52 年後の 1506 年には、旱魃による食糧不足から、メキシコ湾岸地方へ人口が流出し、食料と引き換えに人身売買が横行したこと、ネズミが大量に発生して大飢饉が起きたことなどが描写されている。

王国は存亡の危機に瀕したが、2 人の王はこの危機を王国拡大の契機へと変えた。災害収束後、モテクソマ 1 世は環境再編に努めた。例えば、テスココ湖の堤防を活用して北部の塩水が南部の淡水に混ざり込まないようにし、淡水湖上の耕作地を増設し、農作物の収穫量を増大させた。対岸のチャプルテペックの森から引いていた水道橋は二重管構造にして、常時飲料水を確保できるよう改良した。さらにメキシコ盆地の環境的限界を認識し、メキシコ盆地外へ頻繁に侵攻し、急速に王国の領土を拡大した。また「1 の兎」に開催していた「年を束ねる儀礼」を翌年の「2 の葦」に最初に変更したのも、この王である。

「年を束ねる儀礼」の延期に関しては、モテクソマ 2 世の歴史を記した『ブルボン絵文書』や『フィレンツェ絵文書』に記録されている。1507 年の「年を束ねる儀礼」は、ウィツィロポチトリを祀る月に実施された。まず町中の火が消され、テノチティトラン郊外の「星の丘」で生贄が捧げられ、その生贄の心臓を抜いた胸の穴の上で火の神官が新しい火を起こした。その火はテノチティトラン中心部の火の神殿に持ち込まれ、巨大な火鉢で大きく焚かれ、過ぎ去った 52 年を表す木の束がそこで燃やされた。これは過ぎ去った時間（＝年老いた太陽）を茶毘に伏す葬儀である。そこにはアステカ王国支配下の近郊の諸都市から使者が集められ、テノチティトランの火は各都市に持ち帰られ民衆に配布された。

「2の葦」に大々的な「年を束ねる儀礼」を行なった意義は以下のように分析できる。アステカの神話では、現在の太陽は神々が点した聖なる火から誕生し、神々が命を捧げて動きを与えた。つまり生贄の心臓の上で新しい火を点すことは、新しい太陽（世界）の創造を象徴する。神話では、「2の葦」は戦争の神であるテスカトリポカが火を焚き、太陽に捧げる生贄を獲得する戦争を制度化した年でもある。またウィツィロポチトリの祝祭月にメシーカの神官によって点された新しい火（＝太陽、時間）が諸都市に分配されることで、これらの人々は次の52年間はメシーカ産の太陽を生きることになる。このような神話的背景のもと大規模儀礼を催行することにより、メシーカ王は人間界における権力、神々との交信の独占をアピールすることができる。さらに生贄獲得という動機に基づくメシーカの太陽信仰と地域共同体の伝統的暦のリセット儀礼（年を束ねる儀礼）を重複させることにより、周辺諸都市に対してメシーカの戦闘的思想を正当化し、宗教的、政治的支配力を誇示することができる。

講演会では、1507年の「年を束ねる儀礼」を記念したと考えられる石像彫刻、すなわちテンプル・ストーン（神殿ピラミッド型の王の玉座）、火のヘビ（太陽をサポートする神話的存在でありウィツィロポチトリの武器）、52年分の年の束、の3点を解説した。3点とも暦年「2の葦」が刻まれており、メシーカの戦闘性を表す図像モチーフ（ウィツィロポチトリの暦日、テスカトリポカの暦日、生贄の心臓、戦争のシンボルなど）に満ちている。

このようにアステカ王国は、被災経験を戦略的・思想的に利用し、王国のさらなる発展につなげた。アステカ支配層は、大災害という歴史的事件を暦に関連させて神話や思想に取り込み、儀礼化やモニュメント化によって顕在化することで、メシーカ中心の世界観（太陽信仰）をより広域に知らしめる契機としたのである。

参考文献

- 青山和夫、米延仁志、坂井正人、高宮広土(編)『文明の盛衰と環境変動—マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』岩波書店（2014年）
- カール・タウベ [藤田美砂子訳]『アステカ・マヤの神話』丸善ブックス（1996年）
- リチャード・タウンゼント [増田義郎監訳、武井摩利訳]『図説アステカ文明』創元社（2004年）

第3回

2021年10月21日(木) マルチメディアホール & オンライン

日本の年号(元号)と世界の暦

久禮 旦雄(京都産業大学)

Japanese *Gengo* and World Calendar

KURE, Asao (Kyoto Sangyo University)

ABSTRACT

Two years ago, along with the succession to the throne, the new *Gengo* (*Nengo*) was changed to "*Reiwa*". In this lecture, I will explain the history of the *Gengo* (*Nengo*), which is a calendar era widely used in East Asia, starting with China, the significance of the new era "*Reiwa*", and the *Gengo* in the calendar era around the world.

はじめに — 「新しい日常」の中で

我々人類は、この2年ほどで、「当たり前のこと」「日常」が実に危ういバランスの上に成り立っていることを認識したのではないのでしょうか。新型コロナ・ウイルス感染症の影響はあらゆる分野に及び、感染症対策を組み込んだ「新しい日常」(New Normal)という言葉が用いられるようになりました。

そこで、改めて「日常」とは何かということを見ると、それは日々変わらないこと、昨日と変わらないことが今日、今日あることが明日も行われるということをも前提としていることに気づきます。それは昨日から今日を予想し、今日から明日を推測するという思考がなければ難しいでしょう。

しかも、漠然とした過去から未来に流れる時の流れではなく、1日や1月、1年といった刻みを与えて認識するということになる、かなり文明が発展した段階でなければなりません。特に農耕のための河川の氾濫の予測となると、精度の高い暦の作成が必要になります。人類が現在用いている暦は多く、文明がある程度発展した地域で作成され、今日まで受け継がれているものが多いのです。

1、世界の紀年法・暦と年号(元号)

まず、地球が太陽の周囲を回る周期をもととして、一年をおおよそ365日とする太陽暦ですが、これはメソポタミアにはじまり、エジプト・ペルシア(イラン)で用いられます。そしてエジプトの暦をユリウス・カエサルがローマにもたらします。これがいわゆるユリウス暦で、ヨーロッパで広く用いられます。16世紀にはローマ教皇のグレゴリオ13世により一部改定を加えられたグレゴリオ暦がヨーロッパ諸国の世界進出とともに広く使用されるようになり、日本でも明治以降採用されます。

また、これとは別にアメリカ大陸ではインカ暦・マヤ暦・アステカ暦などの太陽暦が用いられていました。

さて、日本で明治以前に用いられていたのは太陰太陽暦です。これは太陽の周期から1年を365日とし、月の満ち欠け（朔望月）の平均29.5日を1月として組み合わせたものです。29.5日×12月は354日ですので、ズレが生じてきますので、19年に7回の閏月を入れて調整します。ユダヤ暦・インド暦、そして中国の前近代の暦などがこのグループであり、日本の明治以前の旧暦も、中国から取り入れたものを当初はそのまま、江戸時代以降は一部改定して用いていました（貞享暦）。

一方、太陰暦は文字通り月の満ち欠けの周期のみを基準とするもので、30日と29日を交互に繰り返し、一年は354日とするものです。これはイスラーム暦（ヒジュラ暦）が有名ですが、太陽の周期とずれていきますので農耕社会ではほとんど用いられていません。イスラーム暦は砂漠の中のオアシス都市を中心に、交易で生活していたアラビア半島の人々がムスリム（イスラム教徒）の中心だった頃に採用されたもので、ムスリムの数が増加してくると変化していきます。例えばイランは農業も盛んですので、太陽暦が併用されているようです。

暦というのは基本的に年や月の循環ということを前提とした時間の刻み方ですが、これとは別に過去から現在へ直線のかたちが流れる時間に起点を設定し、そこから時の流れを数えるという時の刻み方があります。これを一般的に「紀年法」と称し、その起点を何によって決定するかでいくつか分類されます。

まず「政治的紀年法」として、国が出来たとされる年を起点とする「建国紀年」があります。例えば戦前の日本で用いられた皇紀（今年が2681年）は『日本書紀』に初代天皇の神武天皇が即位したとある年を起点としており、中国や韓国でもそれぞれ古代の聖王とされる黄帝や檀君の即位年を起点とする黄帝紀元（今年が4732年）や檀紀（檀君紀元）（今年が4354年）があります。同じ中国でも近代になってからの建国から数える「革命紀元」では台湾のように「中華民国110年」と表記するものがあります。

また、君主の即位の年を起点とする「王政紀年」としてはタイの即位紀元（今年がワチラロンコン国王5年）のほか、現在日本でのみ用いられている年号＝元号（今年が令和3年）もこれに含まれます。

宗教的な事件の年を起点とする「宗教的紀年法」としてはユダヤ教が用いる創世紀元（今年が5782年）や仏教国のタイなどで用いられる、釈迦が涅槃に入った年を起点とする釈尊入滅（仏滅）紀元（今年が2564年）があります。現在世界的に用いられている西暦はキリスト教生誕紀元（2021年）ですし、イスラム教ではムハンマドがメッカからメディナに遷り、ムスリムの共同体（ウンマ）が出来た年を起点とする聖遷（ヒジュラ）紀元（今年が1442年）があります。

また、起点を定めるのではなく、時間を循環するものとしてとらえる紀年法として干支

があります。これは十干十二支の組み合わせで時を数えるもので、60年で一巡（還暦）します。今年（2025年）は辛丑（かのとうし）にあたります。壬申の乱や辛亥革命など、歴史的事件の呼称に用いられることが多いですが、関西人に親しみ深い甲子園球場も、その建設の年を干支で示したものです。

2、元号（年号）のはじまり

「元号」（明治以前は「年号」）は、中国の前漢、その7代皇帝である武帝（在位紀元前141～87）の時代に始まりました。最初の年号は「建元」あるいは「元鼎」とされています。以後、正統王朝だけで清の「宣統」まで約354の年号が用いられています。この年号制度は東アジア各地に広がり、用いられました。しかし、現在まで続いて用いられているのは日本だけです。

日本では7世紀、「大化改新」の際に孝徳天皇の即位に伴い「大化」という年号（645）を用いたのが始まりですが、その後は断続的・限定的な使用に留まりました。連続的・全国的に年号が用いられるようになったのは対馬からの金献上による「大宝」年号（701）からです。以後、「令和」まで248の年号が用いられています。その背景には、大宝律令という当時制定された体系的な成文法に「公文書には必ず年号を用いよ」と規定されていたことがありました。

当時の東アジア情勢を見ますと、朝鮮半島の諸国（高句麗・百済・新羅）はいずれも一時期独自年号を使用していたようです。

例えば『真興王磨雲嶺巡狩碑』（586）は新羅が東西南北の国境地域に建てた石碑の一つですが、「太昌元年歳次戊子八月二十一日癸未、真興太王、管境を巡狩し、刊石銘記する也」とあり、独自の年号を用いていたことが明らかです。しかし、『三国史記』新羅本紀は、真徳女王2年（648）に唐（中国）を訪れた新羅の使者に対して太宗（李世民）がなぜ独自の年号を用いているのか問いただし、その2年後から唐の「永徽」年号を用いるようになったとしています。このエピソードは、年号は時間の支配を象徴するものであり、その使用は、年号を決めた君主の支配に服することを意味していることを示しています。

またヴェトナムでは13世紀ごろから独自年号を用いており、1945年の阮朝滅亡まで千年近く使用していました。その年号には、おそらく中国の宋王朝の影響のもとで、四字年号が19例あることが注目されます。

3、元号（年号）の決め方

年号の変更（改元）の理由としては、飛鳥・奈良時代には天皇の即位（代始）のほか、白い雉や美しい雲など、めでたいしるしの出現（祥瑞）によるものが中心でしたが、平安時代の半ばからは災害や怪異（災異）、暦の上のタブー（革年）などが理由となりました。そのたびごとに天皇のもとで貴族たちが会議を開催し（年号定）、さまざまな先例や漢字に

ついでに知識をもとに議論を行いました。最終的に決定するのは一貫して天皇でしたが、幼帝が続くと、摂政・関白や譲位した天皇（上皇、院）の意見が重視されるようになり、さらには朝廷そのものの権威・権力が衰える中で、武家が改元の時期や年号の選定そのものに介入することすら行われるようになりました。

江戸時代半ば頃から、頻発する改元とそのたびごとに繰り返される会議に批判的な意見も出てきました。そのため、天皇を中心とした国を目指した明治維新に際して行われた「明治」改元（1868）では、天皇ご自身が皇祖神である天照大神の御分霊をお祭りする内侍所（現在の賢所）で引かれたクジにより、新年号を決定しました。その後出された「行政官布告」には、今後は「一世一元」とすることを「永式」とすることが定められています。

明治の『皇室典範』と、それに基づく具体的な規定が盛り込まれた「登極令」にも一世一元制が規定され、「大正」「昭和」の元号はこれらの規定に基づき決定されることになったのです。

敗戦後、GHQ の占領下に、明治の『皇室典範』とそれに基づく皇室令は廃止されます。戦後の『皇室典範』には、元号に関する規定は存在しません。そのため、当時用いられていた「昭和」元号は、明治の『皇室典範』の前提となる「行政官布告」にその法的根拠が求められることとなります。

昭和 54 年（1979）は「元号法」が成立します。そこでは元号は政令で定められ、皇位継承があった時に改元が行われることが規定されました。「平成」改元はこれに基づいて行われることとなりました。

そして、平成 28 年（2016）の天皇陛下の「お言葉」を受けて成立した、「皇室典範特例法」により、近代以降初めての譲位（退位）が行われ、それに伴い奉祝の雰囲気の中で、新天皇の即位と「令和」改元が行われたことは皆さんの記憶に新しいことだと思います。

終わりに — 「令（よ）き調和」の時代を目指して

元号は世界にいくつもある紀年法の一つですが、他の紀年法が起点を設定し、そこから現在・未来へと時の流れを進めるだけなのに対して、元号は表意文字である漢字を用いて、未来において達成してほしい理想が込められているという点が大きな特色であると言えます。

「平成」は「国の内外にも天地にも平和が達成される」という意味が込められていました。約 30 年の時を経て、譲位を前にした天皇陛下（現上皇陛下）の最後の記者会見において「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵しています」と述べられていたことが印象的でした。

「令和」が、同様に、いつかその終わりに際して、文字が示すような「令（よ）き調和」の時代であったと言われるように、新天皇陛下とともに、私たちは努力していかなければなりません。

公開講座

2021年7月16日（金） オンライン

カタルーニャにおける独立支持の増加 —その要因と現状—

奥野 良知（愛知県立大学）

La subida del apoyo a la independencia: factores y situación actual

OKUNO, Yoshitomo (Aichi Prefectural University)

Resumen

En Catalunya, el apoyo a la independencia aumentó notablemente a partir de 2010. El motivo de este aumento reside en el hecho de que el Estado español disminuyera el nivel de autogobierno de Catalunya sin el “consentimiento” de buena parte de la población catalana. Además, en el referéndum de octubre de 2017, la policía española usó la violencia contra los ciudadanos que fueron a votar. Con esta manera de gobernar tan poco democrática y la mayor “coerción” ejercida, el Estado español perdió por completo su legitimidad en Catalunya. Pero el independentismo también sufre falta de legitimidad porque, aunque los partidos independentistas nunca habían superado el 50 % de votos en las elecciones catalanas, aprobaron la ley de la transitoriedad jurídica y declararon la independencia.

カタルーニャは、バルセローナを中心都市とするスペインとフランスにまたがる地域で、独自の言語（カタルーニャ語）・文化・歴史・メンタリティ・アイデンティティを持ち、カタルーニャ自治州（スペイン側カタルーニャ）は、スペインのGDPの20%を占めるスペイン経済の中心地でもある。



奥野良知 氏

2021年7月16日

カタルーニャでは、近年、スペインからの独立を求める声が急速に高まった。では、なぜ、同地では、独立支持が急増したのか？ 住民投票後、同地はどうなったのか？ 現在、カタルーニャ・スペイン問題は膠着状態にあるが、その要因は何か？ 国際社会はこの問題をどのように見ているのか？

1. なぜ独立支持が急増したのか？

1479年に複雑な同君連合国家であるスペイン王国が成立した後も、カタルーニャ公国は王権と分有された主権を持つ国家として存続し、カスティーリャ王国と一体化しつつ中央集権化を強める王権に対抗しながら議会主義の立場を強化していった。カタルーニャでは、中世来の商工業の伝統を受け継ぎつつ、商工業活動を促進する制度やメンタリティが形成され、同地は18世紀初頭のスペイン継承戦争でカスティーリャ・ブルボン連合に敗北し国家として消滅はしたが、同地では18世紀末から19世紀半ばにスペインで唯一の産業革命が生じ、ヨーロッパ有数の先進地域となる。

だが、19世紀以後のスペイン国家は、後進地域であるカスティーリャと同一視されたスペイン・ネーションⁱの存在しか認めず、中央主権的統治が行われ、カタルーニャに自治は認められなかった。それゆえに同地では19世紀末に、同地を自己決定権を持つネーションだとする、対抗ナショナリズム（マイノリティ・ナショナリズム）としてのカタルーニャ・ナショナリズムが誕生する。だがこれは、スペイン国家内での内的自己決定権（分有された主権＝高度な自治権）を求める動き、スペインをマルチ・ナショナルな連邦制に組み替えることを求める動きだった。

カタルーニャの自治は、1914-23年に4県連合体として部分的に実現したが、1923-30年のプリモ・デ・リベラ独裁政権によって廃止され、1931-39年の第二共和政期に自治政府として復活するも、1939年に始まるフランコ独裁によって再び廃止された。

フランコが1975年に死去した後、民主化を主導したのはフランコ派の人々だった。民主化では、第二共和政期に自治州となったカタルーニャ、バスク、ガリシアの扱いが焦点となり、この3地域だけを自治州とすることはスペインの一体性に反するとして、結局スペイン全土が17の自治州に区分された。1978年憲法（現行憲法）では、スペイン・ネーションの不可分性が強調される一方で、スペインには、その定義を明記しないまま、複数の「ナショナリティ」があるとされた。国家公用語はカスティーリャ語（スペイン語）のみとされ、それ以外の言語は、自治州が望めば自治州レベルで公用語とすることができるのみ記された。結局自治州とは、フランコ派にとっては単なる行政区分に過ぎないものだ

ⁱ ネーション：同じ政治的アイデンティティを持つ共同体。言語、習慣・習俗、宗教等の外形的側面から区分されるエスニシティとは異なる。

ったが、カタルーニャでは新憲法はマルチ・ナショナル連邦制への出発点として受け止められた。

1980-90年代、カタルーニャは中央政府と交渉しながら、自治権を少しずつ拡大していった。だが、管理する権利は増えたが、同地が以前から希求していた決定する権利の十分な獲得には至らず、「質の悪い自治」と呼ばれた。

2000年にフランコ派の流れを汲むスペイン・ナショナリズム右派の国民党がスペインで絶対過半数を獲得すると、国民党政権は、カスティーリャと同一視されたスペイン・ネーションを前提とするユニ・ナショナルな国家観に基づき、再中央集権化の言説を急増させ、カタルーニャの独自のアイデンティティや自治権拡大を批判した。これは、憲法でカタルーニャの自治権が保障されていないがゆえに、国民党が絶対過半数を取れば、同地の自治権は大きく後退しかねないことを意味した。

このような状況下、カタルーニャでは2003年に成立した左派3党政権が、憲法で明確に保障されていない同地の自治権を確立し、同地の側からスペインをマルチ・ナショナル連邦制に近づけることを目的に、自治州の憲法に相当する自治憲章の改正を始めた。新自治憲章は2005年、自治州議会で国民党を除く全政党の賛成（約90%の賛成）で可決され、2006年、重要な内容が大幅に削減されるも国会でも可決され、カタルーニャでの住民投票を経て同年成立し施行された。

だが、当時野党だった国民党が、新自治憲章は憲法の定めるスペインの一体性に反するとして憲法裁判所に提訴し、2010年6月に違憲判決が出され、その結果、カタルーニャの自治権は、2006年以前よりも後退した。これは、自治州議会で例え90%の賛成を得ても、さらにそれが国会で可決されても、選挙で選ばれたのではない12名の憲法裁判事によって違憲とされれば、カタルーニャの自治権は簡単に後退してしまうことを意味した。

加えて、2011年に国民党が政権の座に就き、新自治憲章に違憲判決により定まったカスティーリャと同一視されたユニ・ナショナルな憲法解釈に基づいて、再中央集権化を実施していった。これは、カタルーニャでの国民党の支持が極めて少ないにもかかわらず、絶対過半数を持つスペイン右派（国民党）政権によって、カタルーニャの自治権は容易に後退することを意味した。その結果同地では、以前は15%に満たなかった独立支持が2010-12年に50%近くにまで上昇した。

そもそも、あらゆる政治権力は、強制と同意の組み合わせで成り立っている。2010年以後、スペイン国家は、カタルーニャの自治権を同地の住民の同意を得ずに強制的に削減できることを示した。その結果、同地でのスペイン国家の正当性は失墜し、独立支持が急増したのである。

2. スペイン国家はどう対応したのか？

独立支持が急増したカタルーニャでは、住民投票実施に向けた様々な試みがなされたが、

スペイン政府および憲法裁判所は、住民投票は「スペインの一体性」を定めた憲法に反するとし、それを議論することそのものが違憲だとした。これは、ケベックに対するカナダ連邦政府やスコットランドに対するイギリス政府の対応とは全く異なる。1998年のカナダ最高裁の意見書は、次のように述べている：カナダ憲法の枠内ではケベックは一方的にカナダから独立できないが、住民投票で「明確な設問」のもとに「明確な多数」の賛成があれば、連邦政府と他のカナダはケベックとの交渉に応じなければならない。

中央政府との合意の下で住民投票を実施できないカタルーニャ自治政府は、2017年10月1日、一方的な住民投票の実施に踏み切った。投票にきた市民にスペイン警察による暴力が振るわれ、負傷者は1,066人、319の投票所が閉鎖され、投票率は43%、賛成は90%という結果になった。



2017年10月1日の住民投票でのスペイン国家警察による暴力

<https://www.ccma.cat/324/audiencia-de-barcelona-no-investigara-els-caps-policials-per-les-carregues-de-ll-o/noticia/3096722/>

自治政府はEUの仲介を期待したが、EUは動かず、スイスやマンデラが設立したエルダーズが仲介に動くが、中央政府は応じなかった。中央政府はカタルーニャ自治政府に独立宣言を永久に放棄しなければ自治権を停止すると通告し、これを受けて、自治政府は10月27日にカタルーニャ共和国独立宣言をした。中央政府は、同日カタルーニャの自治権を停止し、国家反逆罪等の嫌で全閣僚に逮捕状が出され、自治政府閣僚は、ベルギーのブリュッセルへの亡命組とスペイン残留組に分裂した。残留組は全員刑務所に逮捕収監された。

3. 袋小路の要因は？

現在、カタルーニャ・スペイン問題は袋小路状態にあるが、その要因は、独立派にも正

正当性が欠けている点があることにある。この問題は、あくまでスペイン国家に第一義的な責任がある。だが、スペイン国家がカタルーニャで正当性を失ったということが、独立派の行動の全てを自動的に正当化はしない。独立派の行動が正当性を持つには、やはり、住民の十分な同意が必要である。

だが、独立派が住民投票の実施と分離移行法を可決した自治州議会は、2015年9月の自治州議会選挙の結果に基づくもので、この選挙では、独立派は絶対過半数の68議席を上回る72議席を獲得したものの、得票率では47.8%と過半数に達しなかった。法的拘束力を持つ住民投票が民主的な意思決定装置として機能し、民主的共存が実現されるためには、投票前に人々が、もし自分が「敗者」になった場合、その結果を受け入れることに同意している必要がある。この「敗者の同意」がないままに実施された住民投票に基づいて独立宣言がなされれば、それは正当性を欠いた行為となってしまう。

4. 国際的にはこの問題はどう扱われているのか？

独立派も正当性が欠けていたことが、EU等の国際機関に仲介をためらわせたとしても、そのことは、この問題でスペイン政府が外交的に勝利したことを全く意味はしない。むしろ、スペイン政府は、外交的には敗北したといえる。

現在、7名の亡命独立派幹部がいるが、彼らが滞在しているスイス、ベルギー、スコットランドは、いずれもスペイン司法の出した欧州逮捕状を拒否した。また、欧米の多くの政治家や知識人、国連、アムネスティ・インターナショナルなどが、監禁中の「政治犯」の釈放を求めている。さらに欧州裁判所は、欧州議会議員に当選したプッチダモンらの不逮捕特権を確認した。決定的だったのは、2021年6月21日、欧州評議会がスペイン政府に、監禁中の「政治犯」9名の釈放、亡命中の「政治犯」の安全な帰国、欧州逮捕状の撤回、刑法の改正、などを求める決議を賛成多数で可決したことである。翌日、現在の社会労働党とポデモス（党）のスペイン政府は、監禁されていた「政治犯」を釈放した。

カタルーニャでは、独立支持と不支持は45%前後で拮抗しているが、住民投票を求める声はここ5・6年常に70%以上ある。またEUは、スコットランドをEUに復帰させる思惑とも絡んで、カタルーニャでの住民投票の実施に前向きになりつつあるとの報道もある。現スペイン政府は、カタルーニャ自治政府との対話を2021年9月から始めるが、中央政府が住民投票に合意するかどうか、今後の最大の焦点となる。

第 14 回スペイン語教授法研究会

ENCUENTRO ONLINE

3 de julio de 2021, sábado

**Aplicaciones de los corpus textuales
a la enseñanza y la investigación del español**

VALVERDE, Pilar (Universidad Kansai Gaidai)

教育への書き言葉コーパスの応用とスペイン語研究

バルベルデ, ピラール (関西外国語大学)

要約

オンラインワークショップでは、はじめにコーパス言語学について簡単に説明し、次に日本の ELE 教育・研究にコーパスが活用されている事例を二つ紹介した。一つはネイティブスピーカーコーパスを使用した言語的な疑問の解決方法、もう一つは日本人学習者コーパスを使用した学生の学習状況の調査方法を取り上げた。



Cartel del encuentro online

¿Qué es un corpus? ¿Para qué sirve? ¿Cómo puedo aprovecharlo para mis clases o mi investigación?
¿Qué corpus elijo? ¿Qué dificultades puedo encontrar?

Si bien es cierto que algunos aspectos de la enseñanza de ELE, como la descripción de los niveles del MCER, deben ser revisados y actualizados usando metodología de corpus (o metodología científica en general) (Llorián, 2017), también lo es que la investigación en este campo suele estar alejada de la realidad que se vive en el aula de lenguas extranjeras. La formación en lingüística de corpus que reciben los profesores de ELE y las publicaciones existentes sobre “corpus y enseñanza de ELE”, en general, suelen quedarse en la teoría (qué es un corpus, cómo se anota, etc.) y pasar de largo por las aplicaciones prácticas que pueden ser realmente útiles a los docentes: ya sea para resolver dudas antes de la clase, como profesores-investigadores de la lengua, o incluso para llevarlos a clase.

Un corpus es especialmente útil cuando necesitamos información adicional sobre algún elemento lingüístico, pero ni nuestra intuición ni los diccionarios ni las gramáticas a nuestro alcance nos ayudan: a menudo en las obras de referencia no hay suficientes ejemplos, o no responden a la pregunta que planteamos, o simplemente no contienen la palabra o estructura que buscamos por tener una frecuencia muy baja o por tratarse de un uso nuevo o no normativo.

El objetivo del taller fue poner de manifiesto la necesidad y el valor de esta herramienta en la enseñanza de ELE y en la investigación en general, a través de la resolución de diez casos prácticos. Los casos prácticos presentados en el taller recogen preguntas o dudas reales, planteadas por estudiantes o profesores de ELE durante mi experiencia docente en Japón, y han sido seleccionados con vistas a ilustrar el uso de cinco corpus del español que considero especialmente interesantes para nuestro contexto docente, que comento brevemente a continuación.

El Corpus del Español del Siglo XXI (CORPES)

Se trata de un corpus desarrollado por un grupo de especialistas en lingüística, en la Real Academia de la lengua Española, y aspira a ser un corpus *de referencia y representativo*, esto es, quiere servir para “obtener las características globales que presenta una lengua en un momento determinado de su historia. [...] Sin embargo, su tamaño es relativamente pequeño si lo comparamos con otros (unos 333 millones de “formas”, que equivalen probablemente a unos 260 millones de “palabras”) y tiene una interfaz bastante mejorable. La principal ventaja de este corpus es que los textos que lo integran han sido seleccionados cuidadosamente de acuerdo con una serie de parámetros como medio, tipo

la llamada *Wordsketch*, que nos muestra, para una palabra dada, con qué otras palabras se combina.

Caso 5: ¿Qué diferencia hay entre “guapo” y “bonito”?

Caso 6: ¿Cómo se usa la estructura “Si + Verbo_x, Verbo_x”?

Caso 7A: ¿Cuáles son las palabras más frecuentes en la estructura “es más + ADJ + que...”?

La base de datos ADESSE

La base de datos ADESSE es una base de datos de verbos y construcciones verbales con el análisis sintáctico-semántico de un corpus de 1,5 millones de palabras. Para todos los verbos, contiene información sobre la acepción del verbo y su clase semántica. Para cada argumento de la cláusula, contiene información sobre su función sintáctica, categoría, tipo semántico, rol semántico y núcleo léxico. A diferencia de los corpus anteriores, se trata de un corpus pequeño con una anotación muy rica introducida de forma manual. Nos permite extraer información sobre construcciones gramaticales y clases semánticas.

Caso 7B: ¿Cuáles son los verbos más frecuentes con el esquema sintáctico S-V-O-PO?

Caso 8: ¿Cuáles son los verbos más frecuentes en cierto campo semántico? Por ejemplo: verbo que expresan desplazamiento en el espacio.

El corpus de aprendices japoneses de español (CELEN)

El último corpus es un corpus formado por textos escritos por aprendices de español de dos universidades, la Universidad Kansai Gaidai (140.000 palabras, 459 aprendices) y la Universidad de Kioto (140.000 palabras, 278 aprendices), con un nivel de español entre A1 y B1. Se trata de un corpus abierto, en el sentido de que el objetivo es ampliarlo con textos procedentes de otras universidades japonesas, para obtener una muestra representativa de cómo los estudiantes escriben en cada una de ellas, y así facilitar la aplicación de la lingüística de corpus a los profesores e investigadores de cada institución.

Caso 9: Los aprendices: ¿Cómo usan “quien”?

Caso 10: Los aprendices: ¿Cómo usan la estructura “...que se llama...”?

En definitiva, los corpus constituyen una herramienta básica para la investigación lingüística (Rojo, 2021) y también para los profesores de lenguas extranjeras (Mc Enery, 2021, Cruz, 2012, Elvira-García, 2021), ya que nos permiten responder a dudas que no podemos resolver de forma satisfactoria con nuestra propia intuición. Sin embargo, no existe un único corpus que nos sirva

para todo, y tampoco podemos confiar ciegamente en los resultados obtenidos, sino que hay un corpus adecuado para cada necesidad y es importante conocer las posibilidades y limitaciones de cada uno de ellos.

Diapositivas de la presentación: <https://bit.ly/3sz5dBS>

Grabación en vídeo del encuentro: <https://bit.ly/3z9CtSL>

BIBLIOGRAFÍA:

- Rojo, G., Klee, C., Muñoz-Basols, J. (2021). *Introducción a la lingüística de corpus en español*, London, Routledge.
- Llorián González S. (2017). “Claves de una revisión de los Niveles de Referencia para el Español, basada en metodología de corpus”. *Marcoele. Revista de Didáctica de ELE*, 25.
- Elvira-García, W. (2021). *Uso de corpus en la clase de ELE: la lengua real como modelo*, Barcelona, Difusión.
- Cruz Piñol, M. (2012). *Lingüística de corpus y enseñanza del español como 2/L*, Madrid, Arco/Libros. Manuales de formación de profesores de español 2/L.
- McEnery, T., Xiao, R. (2021). “What corpora can offer in language teaching and learning”. En *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. Londres, Routledge, 364-380.

Recursos electrónicos:

1. Corpus del Español del Siglo XXI (CORPES): <https://www.rae.es/banco-de-datos/corpes-xxi>
2. Corpus del español: <https://www.corpusdelespanol.org/>
3. Corpus esTenTen 2018: <http://www.sketchengine.eu>
4. ADESSE (Base de datos de Verbos, Alternancias de Diátesis y Esquemas Sintáctico-Semánticos del Español): <http://adesse.uvigo.es>
5. Corpus de aprendices japoneses de español (CELEN): <https://sites.google.com/view/celen>

公開講座

2021年6月8日(火) オンライン

人生一度きり！
—国際捜査の刑事が語る自分流生き方—

安次富 浩

—兵庫県警察本部 刑事部

組織犯罪対策局 国際捜査課 警部

—スペイン語学科卒 (1988年)

You Only Live Once!:

A Police Detective of International Investigation Talks About His Theory of Life

AJITOMI, Hiroshi

--- Hyogo Prefectural Police H.Q.

Criminal Investigation Department

Organized Crime Control Bureau

International Investigation Division

Police Inspector

--- Graduate of Spanish Department (1988)



マルチメディアホールにて

無聴衆の講演をライブ配信

ABSTRACT

“You only live once.” Even though people know that, we rarely think about it. In the lecture, I will introduce my unique career and talk about my thoughts which is “live life to the fullest with no regret.” In latter half of the lecture, I will address police’s new efforts against internationalization in Japan caused by declining birth rate and growing proportion of elderly people.

はじめに

これから社会に出る後輩の皆さんに何かの参考になればと思い、人が生きるということについての私の考え方や自ら歩んで来た道を紹介し、最後に、現在日本が直面する社会の変化と警察の役割についてお話しします。

そもそも人が生きるってなに？

いきなりの問い掛けですが、この疑問に対し端的に答えるのは非情に難しいです。

「人は生まれてきた以上、必ず自らの死を迎える時が来る」この事実は明白で分かり切ったことですが、私は高校生ぐらいの時、このことを考える度に非常に恐ろしくなったことがあるのです。そこで、この感情を押さえながら今後どう生きていったら良いのか考えたのですが、その時出した答えが、「自分の人生の終わりを迎えた時、自分で自分の人生を振り返って 70 点ぐらいが取れる人生を送りたい」という考えでした。

要は、自分の死を悟った時、自分の人生を振り返り、自らに「まあ、よう頑張ったな。やるだけやったじゃないか」と言えれば、自分が歩んで来た人生に納得出来て穏やかな最期を迎えられるのではないかと。

自分の歩んだ道に点数を付けるとすると 100 点を付けることは難しいとしても、70 点から 80 点ぐらいが取ればよしという感じです。

人生の中で、立てた目標に対して思いどおりの結果に至らなくても、その過程で努力し、やり通した事実の方が尊いということで点数アップ、もし、何もせずに一步を踏み出さなければ、それこそ 30 点や 50 点ぐらいの後悔する人生になってしまうと思うのです。

そう考えるようになって以降は、とにかく「やりたいことは、やれる時にやってみよう」と考えて実行してきた人生だったと思います。

目標に向かった学生時代

学生時代に持っていた将来の自分の夢は「教員」でした。

中学時代に出会った音楽の先生は教員になる前の人生経験が豊富で、その先生が話す言葉が、社会での実体験に裏打ちされた自信のあるもので、人生の先輩として憧れ、自分も社会での経験を積んだ上で教員の道を目指そうと思ったのです。当時英語が好きで、英語

の教員を目指そうと思ったのですが、社会に出て仕事をする際英語だけ得意でもだめで、別の言語も習得しようと考えました。そこで、当時のNHKラジオ講座の4言語（韓国語・中国語・ロシア語・スペイン語）の教本を買って帰り、どれが一番いいのか検討したのですが、文字がアルファベットで発音がほぼローマ字読みで分かりやすいことと、元々、スペインの建築家アントニオ・ガウディに興味を持っていたことからスペイン語に決めたのです。（後に動詞の語尾活用の大変さに気づくのですが..）

次に、進学大学を考えた時、教職課程とスペイン語学科があるとの理由で関西外大一本に絞りました。また、校内試験にパスすれば、公費（スカラシップ）による海外留学が可能で、海外留学中の履修分も卒業単位として認められ、4年間で卒業出来ることがとても魅力的でした。

関西外大に入学後は、当初の目標であるスカラシップによるスペイン留学と教員免許取得を目指し、更に、高校時代から続けていた「吹奏楽部」にも入部してクラブ活動を続けました。クラブ活動に参加したのは、その活動を通じてたくさんの友と出会い、自分の人間性も広げなかったという理由もあり、実際、今も交流を続ける親友達はこの時の同級生らで私の人生の宝です。

在学中、何とか留学の校内試験に合格しバリアドリッド大学に9ヶ月間留学し、教員免許も取得出来ましたが、教員免許取得には英語とスペイン語両方の取得が必要で、そのため英語に関する単位も英米語学科と同じぐらい取得する必要がある、更にアルバイトもして、とにかく忙しかったのですが、たくさんの経験が積めた収穫の多い学生生活でもありました。特に、スペイン留学中に、ホームステイ先のお母さん（テレサおばさん）が語ってくれた神様を信じる心に触れて、人の信じる力の凄さを感じました。テレサおばさんの家族は当時、私と同年代の長男と次男との3人でしたが、その十数年前の交通事故で夫と当時5歳の長女を自分の腕の中で亡くしたのです。家族5人の旅行中の車両同士の事故だったそうで、事故直後は、神様を恨んだそうです。しかし、敬虔なカトリック信者であるおばさんは「この試練には何か理由があるに違いない。私が死んで神様のもとに召されたら、神様がその理由を教えてくれるはず。だから、それまで頑張って生きていくことにしたの」とある日話してくれたのです。宗教の話ではないのですが、人が何かを信じれば、その人の人生も変えてしまう力があるものなんだと感じたのです。

人生経験（転職）を重ねた社会人時代

卒業後の目標としては、先にお話したように、一旦社会に出て色々な仕事を体験し、その後、教員を目指すことにし、最初、中堅のゼネコンに就職して一年少し東京でサラリーマンをしました。次に、英字新聞で見つけたスペイン現地法人での不動産会社の仕事に転職しました。その約一年後、スペインに日本料理店出店を計画していた兵庫県の食品会社に転職し、神戸の和食店で一年間マネージャーとしての修行を積んだ後、マドリッドで

の日本料理店の店長として一年間勤務しました。そのマドリッドの店では、国民性や習慣の違いで起きる日本人従業員と現地採用のスペイン人従業員とのトラブルの間に入って苦労したことがありましたが、立場の違う人をまとめる力はついたように思います。

その後日本に帰国し、その食品会社での営業職を続けながら教員の道を目指し教職関係の仕事を探していたところ、兵庫県警が「スペイン語圏で2年以上の海外経験がある者」を警察官として募集としていることを知り、応募して筆記試験の後面接まで受けたのです。正直、以前から警察官になることを考えていたのではなかったのですが、面接の時に面接官から「あなたを刑事として雇いたいが、その覚悟があるか」と聞かれ、躊躇はしたと思いますが、「あのテレビドラマに出てくる「刑事さん」に自分になるのか。よしやってみよう」と思って警察官になったのです。

警察官（刑事）として

29歳で警察官になってからは、スペイン語の通訳や翻訳にも携わりながらも、昇任試験で階級を上げ、巡査部長で長田警察署刑事第一課主任、警部補で生田警察署刑事第一課係長、警部で三木警察署の刑事課長を務め、今は、兵庫県警本部国際捜査課で課長補佐の職に就き、事件捜査の他警察学校での講義を通じて後進の育成を行っています。

警察官になって26年になりますが、その中で感じたことは、警察官、特に刑事の仕事は、その判断基準が一般企業でいう利益追求ではなく、善悪であること（困った人を助け、悪いやつを捕まえる）で、その仕事に法的な裏付け（刑事訴訟法など）があり、犯人を追い詰めて逮捕し、被害者の無念を晴らことが出来るという点で、一人の人生をかける職業として十分価値があると思うことです。警察官になった当初は、正直そんなに長くは続かないだろうと思っていましたが、今説明した理由で続けてくることが出来ました。

では、教員の夢はどうかというと、実はまだ諦めていません。教員は無理としても、警察官の退職後に何らかの教育関係の職に就くことを考え、放送大学で「学校図書館司書教諭」の免許も取得しました。

後輩に伝えたいこと（人生の先輩として）

1回しかない自分の人生をとにかく精一杯生きて欲しいと思います。具体的目標を持つことも大事ですが、定まらない時もありますので、興味のあることや、やってみたいことを片っ端からやってみて、自分を磨いてみる。その中で、新たな自分を見つけることもあると思います。

それと、ぜひ海外留学（生活）を経験して欲しいです。特に、感受性が豊かな若い時代に海外に出てみると、日本国内にいるとわからない日本の良い部分や良くない部分がよくわかり、以後の自分が生きて行く中での糧になると思います。

今後の社会変化と警察の役割

今日本が直面している社会変化は「少子高齢化」です。日本人の人口は過去 10 年連続で減少し、実際に労働人口の不足や社会保障基盤の脆弱化などの問題が起きています。その問題解決に、日本政府は外国人材の受け入れ拡大を平成 30 年の政府閣議による「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策」として推し進めることを決定し、警察庁としても、その方針に沿った「在留外国人の安全確保に向けた総合対策」という通達を全国の警察に発出し、今後増加する外国人の安全を確保しながら、犯罪情報を収集して犯罪組織が外国人コミュニティに浸透しないよう対策をとっています。

私が個人的に考える将来の日本の理想像はリーチマイケル主将が率いたラグビー日本代表です。リーチマイケル主将は高校生の時に来日し、周囲の日本人に助けられて成長し、日本代表では「日本のために頑張る」と言って試合に臨んだそうです。このように、単なる労働者ではなく我々の隣人として外国人を受け入れて、日本を第二の故郷と思ってもらえるたくさんの外国人に定住してもらい、一緒になって今後の日本を盛り上げなければ、今後の日本の成長は見込めないのです。

そのためには、まず、安定した治安維持が欠かせないことが大前提で、その使命を帯びた警察の責務は大きいと感じています。

教員エッセイ

インカ帝国の源流を求めて

土井 正樹 (関西外国語大学)

Exploring the Source of the Inca Empire

DOI, Masaki (Kansai Gaidai University)

ABSTRACT

In what is now Peru, an empire existed earlier than the Inca Empire. This is the Wari Empire. So far, I have been based in the city of Ayacucho, which is close to the capital of the Wari Empire. My studies to date have revealed the independence and influence of the general public under the control of the Wari Empire. In the future, I would like to clarify how the Wari Empire emerged.

インカからワリへ

旅行会社などが実施している行ってみたい世界遺産ランキングで、いつも上位にくるのがマチュ・ピチュです。遺跡や南米に関心のある方でしたら、マチュ・ピチュがインカ帝国と関係し、南米ペルーにある遺跡ということもご存じかもしれません。では、「インカ帝国が栄えていたのはいつ頃ですか?」「インカ帝国よりも古い時代に現在のペルーで栄えていた社会は何ですか?」という質問には答えられるでしょうか?



マチュ・ピチュ遺跡

マチュ・ピチュ遺跡を遺したインカ帝国は、南米大陸の中央アンデス地域（現在のペルー一山岳部と海岸部を中心とする地域）におけるローカルな社会展開の最後に出現した社会です。その最盛期は今から 500 年ほど前、日本でいえば室町時代にあたります。「なんだ、意外と最近なんだな」と思う方もいることでしょう。実は私自身かつては、インカ帝国はエジプトの三大ピラミッドと同時代の社会であると漠然と考えていました。しかし、高校の世界史の授業で、16 世紀の大航海時代にインカ帝国がスペイン人によって滅ぼされたことを知り、それではインカ帝国よりも古い時代にはどんな社会が存在したのだろうか、という疑問をもつようになりました。これが、私がペルーの古代文化に関心をもつようにな

ったきっかけの一つです。

大学院に進学し、インカ帝国が栄えた時代よりも古い時代のことについて本格的に調べてみると、インカ帝国よりも前に帝国と呼ばれる社会が存在していたことがわかりました。それが、現在研究対象としているワリ帝国です。

アヤクーチョ

ワリ帝国について調べるために拠点としているのが、ペルー中央高地南部に位置するアヤクーチョ市です。この町は同名の州の州都であり、私が通い始めた20年ほど前は、スペイン植民地期の面影を色濃く残す、コンパクトな町でした。アヤクーチョ市からバスで40分ほどのところにワリ帝国の首都であるワリ遺跡があります。

もともとワリ帝国について調査するためにアヤクーチョ市を訪れたのですが、今ではすっかりこの町が気に入っています。私が通い始めた頃のアヤクーチョ市は、スーパーなどもありほどほどに都会ではあるものの、町のはずれから中心まで徒歩で行くことができました。そのうえ、頻繁に祭りが行われ(私は参加したことはありませんが、セマナ・サンタ[聖週間]というキリスト教のお祭りが有名です)、インカ帝国時代の公用語であったケチュア語が飛び交い、おいしい地元料理もあります。今では町の規模はすっかり大きくなりましたが、中心部の様子は以前とそれほど変わっていません。



アヤクーチョの町を一望できる展望台にて

ワリ帝国

ワリ遺跡は近年本格的な調査が始まったばかりですが、規模、内容共にペルーを代表する大遺跡です。この遺跡がワリ帝国の中心であり、ここには皇帝や多くの行政官、そして職人、農民などが暮らしていたと考えられています。最近の調査により、皇帝の墓と考えられる壮麗な施設や儀礼の場と考えられる特殊な建物の詳細が次々と明らかになってきています。

ワリ遺跡に存在するカラフルな土器、そして高い石積みの壁や儀礼のための特徴的な建物に似たものが、ワリ遺跡から遠く離れた地域でも見つかっており、そのようなものが見



つかった場所は、ワリ帝国がその地方を支配するためのセンターであったと考えられています。これまではこういったセンターで集中的に調査が行われており、それらの調査成果に基づき、ワリが皇帝を頂点とする高度に階層化された社会であり、武力の行使を含め、強力な支配が行われていたと考えられてきました。

ワリ遺跡の長大な石壁

帝国支配下の一般の人々

私がワリ帝国について調査を始めた頃、ワリ帝国では皇帝や行政官が強力な支配を行っていたと、多くの研究者が考えていました。しかし彼らは、支配者たちについては調査していましたが、当時の一般の人々、すなわち支配されていたとされる側の人々については調査していませんでした。そこで私は一般の人々の立場からワリ帝国の支配について考える調査に着手しました。この研究によって少しずつではありますが、一般の人々の主体性や支配者に対する影響力が明らかになってきています。

この調査の過程で、そもそもワリ帝国の出現を促したのが、山岳部の人々が海岸部の人々から進んだ思想や技術を吸収したことにある可能性も明らかになりました。そこで今後は、山岳部の人々と海岸部の人々の間で具体的にどのような交流があり、それがワリ帝国の出現とどのように関わっていたのかを明らかにしたいと考えています。

編集後記

コロナ禍が2年を経過しても終息する兆しが見えない中、秋期恒例のラテンアメリカをテーマとした公開講演会に加え、春期には、スペインのカタルーニャ独立問題について講演会を開催することができた。コロナ禍がもたらした新たなオンライン講演会のメリットのおかげで、いずれの講演会にも、これまで以上に多くの人々に視聴してもらえたことが嬉しい成果だった。

イベロアメリカ研究センター長 林 美智代

2022年2月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1

TEL.072-805-2801 (代表)

<http://www.kansaigaidai.ac.jp>